

〔資料紹介〕

千葉市旦谷町北原遺跡発見の独鈷石

小 澤 清 男

は じ め に

ここに紹介する独鈷石は、昭和53年の春、千葉市旦谷町在住の石橋義雄氏が旦谷町北原 431 番地先の畑を耕作中に発見し、加曽利貝塚博物館に寄贈した資料である。この独鈷石は、加曽利貝塚出土の独鈷石とは形態及び整形法などが異なり、かねてから注意していた遺物の一つであった。そこで、この独鈷石が加曽利貝塚出土の独鈷石や縄文時代後・晩期の様相を考えていく上で重要な遺物の一つであると思われるので今回資料紹介し、併せて千葉県下という限られた地域ではあるが出土例を概観し、独鈷石の機能・役割について少し考えてみることにした。

独鈷石という呼称は、形態が仏具の独鈷に似ているところから付けられたもので、他に神代石や誕生石・石鈷・雷鈷などの呼称も見られる。また、両端部に磨製石斧のような刃部があるところから両頭石斧ともいわれており、主に縄文時代後・晩期に東日本を中心に分布し、弥生時代まで出土する遺物である。本来、この遺物の機能・役割は仏具の独鈷とは全く関係なく、道具の機能・役割が呼称と一致をみない遺物の一つである。報告によっては、「独鈷状石器」（渡辺 1961）や「独鈷形石器」（米田他 1977）「独鈷状石製品」（米田 1981）としているものもあるが、ここでは従来から広く慣用として使われている「独鈷石」を用いた。

1 北原遺跡

独鈷石が発見された千葉市旦谷町北原遺跡は、印旛沼へ流れ込む鹿島川によって樹枝状に開析された小支谷である吉岡支谷に面し、四街道市吉岡方向から佐倉市内田付近で鹿島川本流と合流する並木川の右岸、標高約20～25mの舌状台地先端部に位置する（第1図）。現在ここは畑地になっており、縄文時代後期中葉加曽利B式土器を主体に後期から晩期にかけての土器片が散布している。北原遺跡の位置する吉岡支谷は、現在千葉市・佐倉市・四街道市の3市におよび、これからここに紹介する独鈷石や北原遺跡について考えていく上で、特に周辺地域の縄文時代後・晩期の遺跡についても概観しておく必要がある。

先ず、縄文時代後期では対岸に加曽利B式期の佐倉市坂戸木戸場遺跡、坂戸念仏場東遺跡、坂戸尾牛遺跡、坂戸菊丹戸遺跡の4遺跡がある。縄文時代晩期では姥山Ⅱ式期の四街道市六反歩遺跡や姥山Ⅱ式期から前浦式期の佐倉市坂戸念仏場西遺跡の2遺跡があり（四街道市1982、佐倉市

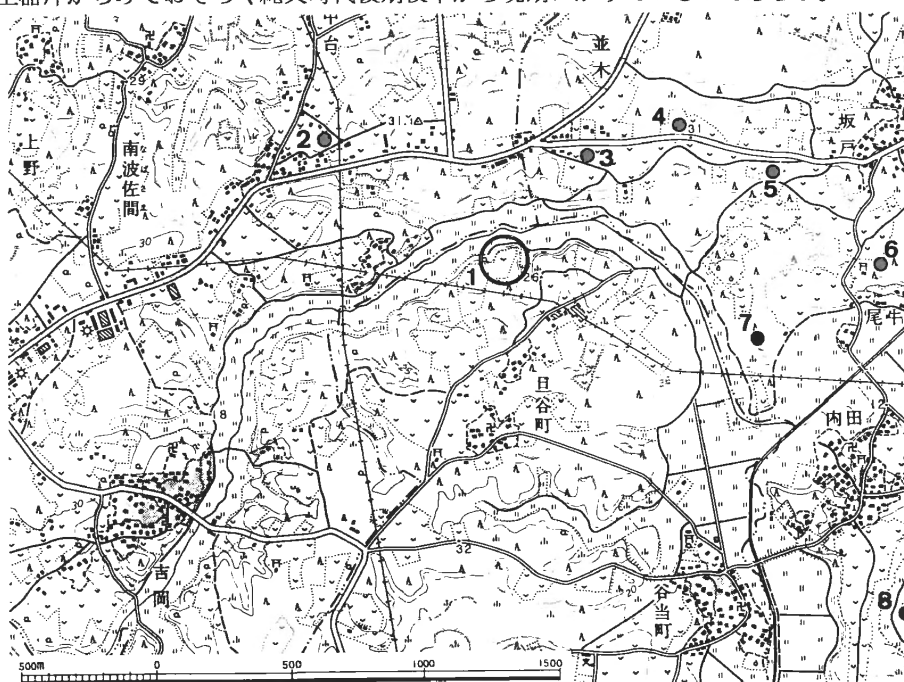
1984)、周辺地域に縄文時代後期から晩期にわたる遺跡が群集している様子がうかがえる。

このような周辺地域の様相からみて、独鈷石が発見された北原遺跡も鹿島川流域の小支谷に面した縄文時代後期から晩期にわたる遺跡群の中に包括される貴重な遺跡の一つと思われる。

2 北原遺跡発見の独鈷石（第2図）

この資料は、耕作による傷が一部見られるものの完形品である。形態は、体部中央に括が全周し括の両縁に帯状隆起がめぐり、両端部は磨製石斧の刃部に似るとい形態上の特異性を呈している。断面は、括部、帯状隆起とも楕円形であるが、両端部はやや扁平である。そして、帯状隆起から先端に行くにしたがい先細になるが、刃部は磨製石斧のような鋭さはなくむしろぼてっとした鈍い感じで、とても物を切ったり削ったりというような実用利器とは考えられない。

計測値は、全長 187cm、中央括部の最大値 3.9cm、最小値 3.2cm、帯状隆起の最大値 5.3cm、最小値 4.4cm、重量 4138g である。手に持った感じはかなりずっしりと重い。整形は、全面に粗い敲打を行った後、両先端部の一部に研磨を行っている。また、2条の帯状隆起の一部にも研磨痕が観察できた。器面は全体的にざらついている。その他、帯状隆起の頂部に数ヶ所打痕が認められる。石材は硬度の高い閃緑岩である。所属時期は、正確には不明であるが、表面採集した土器片からみておそらく縄文時代後期後半から晩期にかけてのものであろう。

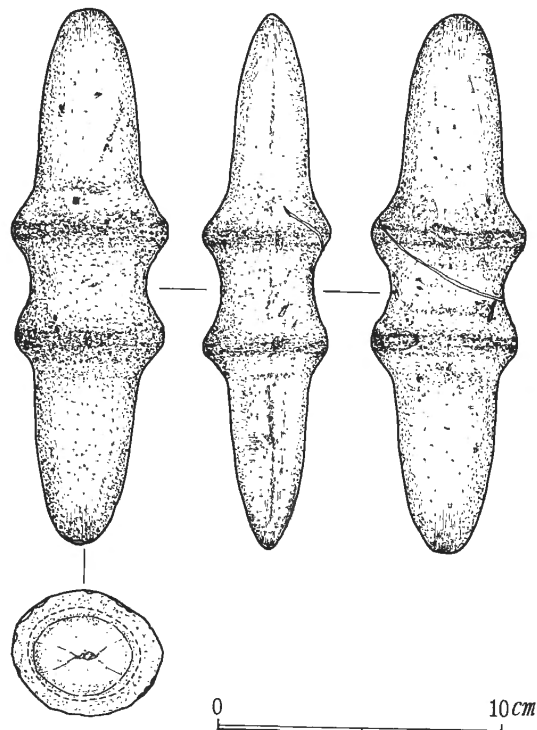


第1図 北原遺跡と周辺の縄文後・晩期の遺跡

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 千葉市旦谷町北原遺跡（縄文・後期） | 5. 佐倉市坂戸念仏場東遺跡（縄文・後期） |
| 2. 四街道市六反歩遺跡（縄文・晩期） | 6. " 坂戸尾牛遺跡（縄文・後期） |
| 3. 佐倉市坂戸木戸場遺跡（縄文・後期） | 7. " 坂戸菊丹戸遺跡（縄文・後期） |
| 4. " 坂戸念仏場西遺跡（縄文・晩期） | 8. " 飯塚荒地台遺跡（縄文後～晩期） |

3 千葉県下出土の独鈷石 と独鈷状土製品

千葉県下における独鈷石出土数は、現在のところ26遺跡37例を数え、独鈷状土製品を加えると計27遺跡38例にのぼる（小澤 1985）。そのうち実測図で正式報告されているものは第3図に示した21例である。独鈷石の形態分類は、先学諸氏によって試みられている（大野 1909、米田 1981）のでここでは特に触れない。資料の制約はあるものの、道具の機能・役割を考えていく上で、その道具の破損の仕方について見ていくことは、使用痕などの観察とともに一つの有効な方法であると考えるので、独鈷石を破損の仕方によって幾つかに分類しながらその機能・役割の一端に触れてみたい。



第2図 北原遺跡発見の独鈷石実測図

1 は三宅米吉氏が人類学雑誌に紹介した資料である。詳細は不明であるが、「……近頃千葉県下総国平山村ノ貝塚ヨリ得タル……」（三宅 1892）と記載しているところから、現在の千葉市平山町からの出土である。平山町に所在していて独鈷石を出土する可能性のある後・晩期の貝塚は、長谷部貝塚・築地台貝塚・台畑貝塚の3貝塚であるが、そのどれであるかは解らない。しかし、三宅氏によるこの千葉市平山町出土の独鈷石の報告が県下における独鈷石の最初の正式な報告であろう。2 は印旛郡印西町天神台貝塚出土で（金子他 1961）、整形は敲打後研磨によって仕上げ、先端部に打痕が見られる。石材は花崗閃緑岩である。3・10 は成田市殿台遺跡出土で（藤下他 1984）、3 は敲打で仕上げられ中央括部から折れている。特記事項は、両端部の一部に丹塗の痕跡が認められることである。10 は全面研磨によって仕上げられ、両端部は大きく破損し打痕が明瞭である。4・8 は千葉市椎名崎遺跡の表採資料である（栗本他 1979）。4 は端部の一方が破損し、8 は両端部に打痕が認められる。5・6・7・13 は市原市西広貝塚出土で5～7 は硬砂岩製、13 は石英安山岩製である（米田他 1977）。5 は中央括部で折れ、6・7 は大部分破損している。13 は両端部に打痕が見られる。9 は佐倉市吉見台遺跡出土で凝灰岩製である（近森他 1983）。11・12 は千葉市築地台貝塚出土で（折原他 1978）、特に11 は3号住居址から出土しており、住居址の時期が晩期初頭安行Ⅲa式期であることから独鈷石も当該期と思われる。全面に丁寧な研磨が行われ両先端部に打痕が見られる。現在のところ県下の遺構内

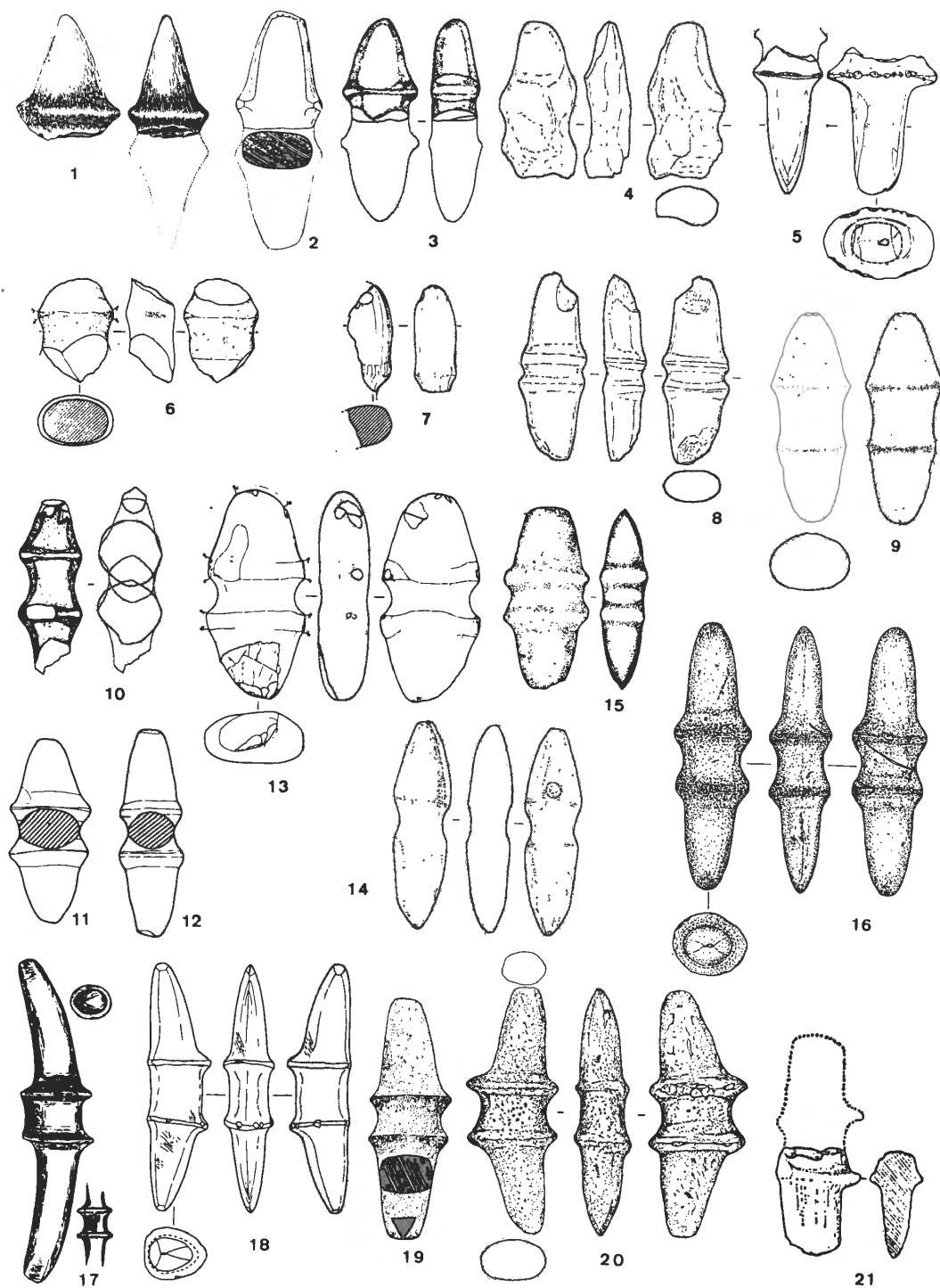
出土の独鈎石は、本例と我孫子市下ヶ戸・宮前貝塚の安行Ⅱ式期の住居址から2例出土しており、所属時期を明らかにするだけでなく機能や役割を考えて行く上で貴重な出土例である。12は全面に研磨が行われ両端部に打痕が見られる。14は袖ヶ浦町山野貝塚出土で凝灰岩製である（野村他 1975）。両端部に打痕が見られる。15は富津市富士見台遺跡出土で両端部が良く研磨され打痕も認められている（梶山他 1972）。16は本稿で紹介した資料である。17は香取郡栗源町岩部出土で坪井正五郎氏が報告した資料である（坪井 1910）。18は八日市場市大堀遺跡から耕作中に発見されたもので、石材は斑斕岩である。整形は丁寧な研磨を全面に行い、一部斜方向の研磨痕が見られる。両先端部はかなり鋭く研ぎ出され、中央括部の縁に2条の帯状隆起がめぐる（小澤 1985）。19・20は加曽利貝塚出土で、19は甲野 勇氏が紹介した資料である。詳細は不明であるが、「全長 18 ㎝、體部断面は鼓形、両端刃状を為す。石質不明。全體美麗に磨製されたる優品。」（甲野 1931）と記載している。20は石英閃緑岩製で整形は研磨である（杉原他 1968）。特に打痕は見られない。21は成田市荒海貝塚出土で（西村他 1965・西村 1975）、県下の出土例中唯一の独鈎状土製品である。中央括部から破損している。

次に、これ等を破損の仕方（破損型）と打痕の有無及び材質によって分類を試みると以下のようになろう。

- a 類・中央括部で2つに折れたように破損しているもの（第4図-1～3・5・21）。
- b 〃・大部分欠損し破片の一部となっているもの（第4図-6・7）。
- c 〃・両端部や一方の端部が大きく破損しているもの（第4図-4・10）。
- d 〃・両先端部や一方の先端部に明瞭な打痕が認められるもの（第4図-2・8～15）。
- e₁ 類・完形で整形が敲打により先端部に打痕が認められないもの（第4図-16）。
- e₂ 類・完形で整形が研磨により先端部に打痕が認められないもの（第4図-17～20）。
- f 〃・土製品であるもの（図4-21）。

4 まとめと今後の課題

今回、独鈎石の機能・役割に関して破損の仕方と敲打の有無などから a～f まで7分類することができた。そして、d 類に何らかの実用利器的要素が見られるものの e₁・e₂・f 類に非実用的要素が見られた。従来、独鈎石は完形品が多いと言われてきたが、破損の大小を別にすれば何らかの破損を受けているものの方が完形品より多い。また、石材に斑斕岩や輝緑岩など硬度の高い塩基性の火成岩（新井 1984）を用いているものがある。この様な石材は堆積岩に比べ加工に労力がかかり、また簡単に割れないという特性がある。よって、a～c 類は意識的に打ち割られた可能性が高い。道具の機能を考える上で付着物も重要な要素である。秋田県五十丁遺跡、鎧田遺跡、山形県釜淵遺跡から中央括部にアスファルトの付着した独鈎石が発見されている（安孫子 1982）。これは、アスファルトの膠着性からみて具体的に柄の装着が考えられよう。また成田市殿台遺跡出土の資料に1例敲打の凹中にかろうじて確認できる程の丹塗の痕跡が認められ、非日常的な非実用利器である要素がうかがわれる。f 類とした独鈎状土製



第3図 千葉県下出土の主な独鈷石(1~20)と独鈷状土製品(21)

1. 千葉市平山町 2. 印西市天神台貝塚 3. 10. 成田市殿台 4. 8. 千葉市椎名崎遺跡
5. 6. 7. 13. 市原市西広貝塚 9. 佐倉市吉見台遺跡 11. 12. 千葉市築地台貝塚
14. 袖ヶ浦町山野貝塚 15. 富津市富士見台遺跡 16. 千葉市北原遺跡
17. 栗源町岩部 18. 八日市場市大堀遺跡 19. 20. 千葉市加曾利貝塚 21. 成田市荒海貝塚

品は、他に長野県氷遺跡（永峰 1957）や奈良県橿原遺跡（末永 1977）にも見られる。独鈷石の最も古い確実な所属時期は後期末葉安行Ⅱ式期であり、安行Ⅲa～Ⅲc式期にわたり多く出土し、晚期中葉から後葉にかけ土製品が製作される。この様な「独鈷石」→「独鈷状土製品」の出現は、「石冠」→「石冠形土製品」の出現と似ており、今後両者の関連性にも注意をはらって行きたい。

独鈷石の機能は、一部に実用利器的要素がうかがえるものの全体的には非日常的な非実用利器であろう。このことは、主に1遺跡から1～2点の出土であるという出土頻度の低さにもうかがわれよう。おそらく、独鈷石はかつて日常的な実用利器であった石斧類の代用として後期末葉に採集経済社会末期に関わる儀礼用の儀器として製作されたもので、晩期に更に儀器化が進行し完全に実用性を喪失した典型として独鈷状土製品が製作されたのであろう。そして、弥生時代になると福島県宮崎遺跡例（周東他 1977）のように丹を塗り両端部を打ち割って再埋葬に関わる祭祀遺物として昇化してしまうものと考えられる。なお、今回は十分な考察ができなかった。より詳しい考察は次回に譲りたい。

最後に、本稿をまとめるに際し特に石材の鑑定を引き受けてくださった埼玉大学教授・新井重三先生をはじめ、武田宗久、金子浩昌、藤下昌信、栗本佳弘、庄司 克、須田 勉、米田耕之助、堀越正行、岡村道雄、折原 繁、福間 元、石田守一、寺内博之、那須正義、村石真澄、大津誠司の各氏にお世話になった。記して感謝御礼申し上げる次第である。

（千葉市立加曽利貝塚博物館）

〈参考文献〉

- 安孫子昭二 1982 「アスファルト」『縄文文化の研究』8 社会・文化
新井重三 1984 「加曽利貝塚より出土した石器用石材について」『縄文時代の石器 ― その石材の交流に関する研究 ―』千葉市立加曽利貝塚博物館
大野雲外 1909 「独鈷石の形式分類に就て」人類学雑誌 第24巻第276号
小澤清男 1985 「千葉県八日市場市大堀遺跡出土の独鈷石と他2例 ― 独鈷石の機能・役割をめぐって ―」法政考古学 第10集
折原 繁他 1978 「千葉市築地台貝塚・平山古墳」千葉県文化財センター
金子浩昌他 1961 「印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査（本編）」千葉県教育委員会
栗本佳弘他 1979 「千葉東南部ニュータウン6 ― 椎名崎遺跡 ―」千葉県文化財センター
甲野 勇 1931 「独鈷石資料」古文化 第12巻第5号
佐倉市教育委員会 1984 「佐倉市埋蔵文化財分布地図」
周東一也他 1977 「岩代宮崎遺跡」福島県大沼郡金山町教育委員会
末永雅雄 1977 「大和考古資料目録」5 奈良県立橿原考古学研究所
杉原莊介他 1968 「加曽利貝塚Ⅱ ― 加曽利南貝塚調査報告 ―」千葉市加曽利貝塚博物館
梶山林蔵他 1972 「千葉県富士見台遺跡の調査」考古学雑誌 第58巻第3号
近森 正他 1983 「吉見台遺跡発掘調査、概要Ⅱ」佐倉市教育委員会
坪井正五郎 1910 「机上の友（一）」人類学雑誌 第26巻第297号
永峰光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」石器時代 第9号
西村正壽他 1965 「関東における縄文式最後の貝塚」科学読売 第17巻第10号
西村正衛 1975 「千葉県荒海貝塚（第二次調査・続）」学術研究 第24号
野村幸希他 1973 「袖ヶ浦町山野貝塚」千葉県都市公社
藤下昌信他 1984 「成田市郷部北遺跡群調査概要（加定地・巖台遺跡）」成田市郷部北遺跡調査会
三宅米吉 1892 「雑案数件」人類学雑誌 第7巻第74号
四街道市教育委員会 1982 「千葉県四街道市埋蔵文化財分布地図」
米田耕之助他 1977 「西広貝塚」上総関分寺遺跡調査団
米田耕之助 1981 「独鈷状石製品覚え書」古代 第71号
渡辺 誠 1961 「所謂独鈷状石器の未成品の例」貝塚 第103号